

パネル発表「学校飼育動物副読本ーアニマルニーズー」

藤井敬子

1 はじめに

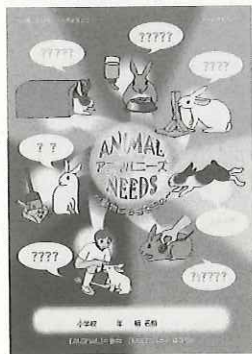
近年、子どもを巡るセンセーショナルな事件が頻発するにつれて、子どもたちに命の大切さを伝えることの必要性、そしてその際に架け橋としての動物の果たす役割が大きいことは、教育関係者、獣医師、また児童心理学者をはじめ多方面から様々な形でアナウンスされてきている。

確かに、子どもと動物が関わることはとても意義深いことではあるが、しかし残念ながら現実には必ずしも良い状態の動物だけが子どもたちの周りに存在しているわけではない。特に学校現場では感性豊かな子どもたちによりよい状態の

動物を見、ふれあうこと、また大人達が真剣に動物のよりよい状態のために取り組む姿を見せることこそ最重視されなければならない。これによって彼らは他者と共感する心、感情移入できる感性、そしてあらゆる命を尊重し責任を果たすことの大切さと言ったものを身につけていくのである。

そこで我々は、基本的な学校飼育動物の生理・生態・習性はもちろん、よりよく生きるとはということに視点を置いた、学校飼育動物副読本ーアニマルニーズーを作成したのでここに紹介する。

2 内容（紙面の都合上特記すべきページのみ掲載）



表紙



目次



裏表紙

表紙：この副読本のテーマである「動物がよりよく生きるために必要なこと」を考えさせる。ただ生きるだけでなく環境エンリッチメントにも配慮した飼育環境の提供について考える。

目次：生態系の中の相互依存を理解させる。生態系から切り離された飼育動物に対して果たすべき責任を考える入り口とする。

裏表紙：動物も自分と同じように生き（成長→老化）ていることに気づきそのステージに応じた生理やケアの必要性などを知らせる。

3 おわりに

動物を介在させた教育において、実施者が常にジレンマとして持っているのが、動物のよりよい状態をこどもたちに提供できるかということである。いわゆる「ふれあい教室」は動物へのストレスを考慮すると、こどもたちには物足りなさというストレスを残してしまう。しかし、実施者が動物のよりよい状態を確保した上での継続した動物を介在させた教育は、こどもたちに動物（他者）に共感し、感情移入していく感性を磨く。これにより彼らは単なるふれあいでは学び得なかった動物のために「自分ができること」、「我慢しなければならないこと」、「してあげなければならないこと」言い換えれば、感情ではなく理性を持って適正に動物と接すること、飼養、そして利用を学んでいくのである。子どもたちが自ら考え、動物に必要なこと（アニマルニーズ）の吹き出しを埋める力を身に付ける一助となることを期待する。

((社)奈良県獣医師会学校飼育動物委員会)